

◆ムリーリョの「アレクサンドリアの聖カタリナ」

画面中央に全身像でとらえられた聖カタリナは、両手を広げ天を見上げています。全体的に暗く沈んだ画面にあつて彼女だけに強烈な光がさし、まるで舞台の上でスポットライトを浴びているかのようだ。彼女の視線の先には、右上方からは棕櫚(しゅろ)の葉を掲げた天使が、カタリナを迎えに舞い降りんとして、いよいよ彼女が天に召される時が近づいていることがわかる。

本作の背景の建築の設定は、《聖母の教育》のような、ムリーリョによる同時期の作品と共通点が多い。左に太い円柱が支え、画面右へと手すりが回り込む、張り出したバルコニーのようなところで物語は展開している。当館で撮影されたX線写真と比較すると、完成作の構図に落ち着くまで、背景についてかなりの修正が施されたことが確認できる。

ムリーリョの聖カタリナを伝統的な図像と比較したとき、この画家の指向がより鮮明となる。ここにはクラーナハ(父)の作品で確認された死刑執行人の姿は見えない。その意味で構成上ラファエロの例に近いと言える。しかし、肝心の聖女の目印である車輪はどこにあるのか。答えは、彼女の背後に半分に折られた形で影に沈んでいる。ムリーリョの聖カタリナでは聖女の逸話的な要素が極力排除されていると考えられよう。

手のひらを天に向け両手を広げ、上方を見上げるポーズは、宗教的法悦を表す際に用いられる、バロック美術に特徴的な身振りのひとつである。この点と関連して、カタリナの衣装、身振りについて興味深い先行例がある。グイド・レーニ(1575-1642)による同主題の作品を見てみよう。ただし、この作品においては、刀を振り上げる刑吏、カタリナに祝福を施す天使の数、など相違点も多い。このことから考えて、ムリーリョはレーニの作品に見られる劇的性格をより強める一方、殉教に臨む聖女の心的な揺れに焦点を当てたと見えよう。

(学芸員 生田ゆき)



ムリーリョ
《聖母の教育》
1655年頃



ムリーリョ
《アレクサンドリアの聖カタリナ》
X線写真 田中善明撮影



グイド・レーニ
《聖カタリナの殉教》
1606年